

# 小栗史朗先生を偲ぶ

岡田 祐成 (愛知県／愛知県高齢者協同組合)

2月26日、我が愛知高齢協顧問で、全国保健所長会会長を務められた小栗史朗先生が亡くなられた。73年の一生であった。

奇しくもこの日、同じく愛知高齢協副理事長で日本の社会保障闘争の契機となる朝日訴訟で中心的役割を担われた長宏先生も逝去され、愛知高齢協にとっては二重の悲しみに浸る日となった。

もとより、小生と小栗先生とのかかわりは、小生の叔母が名古屋市の保健婦であったことから、子どものころから小栗先生が勤められる保健所によく連れていってもらったことに始まる。

そして、年月を経るなかで小栗先生が保健所を退職され、日本福祉大学に招かれ教壇に立たれていたころ、小生も同大学大学院研究生として在籍し、帰宅時に先生を知多半島の先端の学舎から名古屋市内の自宅まで車で送らせていただく車中で、よくお話し（今にして思えば、これが先生の講義を受講したことのない小生にとっては、先生からの講義の時間であった）をさせていただいた。また、この頃、小生が筆稿した保健・医療関係の論文（『系統農協組織の健康管理・保健医療活動と「生活活動基本方針」の評価指標』農林統計調査通巻451号、『医療生協と事業団』医療経済研究会会報No37など）全てに、必ずといってよいほどお目通しをいただき、いろいろとご指摘いただいた思い出がある。特に、保健医療分野における「公的セクター」と「協同組合保健医療」の問題では、行政改革にもとづく行政の機能縮小が当時具現化してきたため、「日本型福祉社会」構想と住民の「相互扶助」機能との問題をもからめ、先生とは活発にこの点を議論したものであった。協同総研への先生の紹介もこんな議論の流れからであったと思う。

こうしたなかで、小生も労協運動にかかわり、高齢者協同組合の設立に努力してきたわけだが、このなかで94年7月には先生を押し立て「高齢者協同組合研究会」を発足させ、先生をこの代表にまつりあげてしまった。精神障害者の共同作業所を運営されようとしていた先生にとっては、ひょっとしたら「ありがた迷惑」ではとの思いもあったが、親子程年の差がある小生の申し出を、実の子からの申し出のごとく嫌な顔ひとつせず、いとも快く引受けていただいた点は、先生のお人柄をよく表す出来事であった。

その後、ご病気の悪化のなかで、高齢協の運動方向を見定めることなく、理事会にもほとんどお顔をみせられず旅立たれてしまったことは残念でならない。

先生にはもう少し「現役」でいてほしかった。ご冥福を祈りたい。

# 『若いと暮らす』

●●●安田 陸男

一通の手紙をいただきたい。差出人は「小栗郁子」とあった。もしかしたら……胸騒ぎがした。開封してやっばり、ショックだった。

「毎週土曜日掲載の安田さんのエッセイは、二人揃って必ず読ませていただいていた。過去形で申し上げることになっていました。は、実は、主人は2月26日、73歳で墓を引いてしまったからでございます」

元日本福祉大学教授、小栗史朗さんの死去のお知らせだった。胆管がんだった。小栗さんは、昨年7月「老いと暮らす」の連載を始めて以来、絶えず、はがきで励ましてくれた人だった。第1回目掲載の翌日の消印でい

なだいてから2月2日の消印まで15通に達した。とくに昨年9月は、掲載の都度お手紙に接した。いずれも筆跡が震えていた。闘病生活の中で、筆とも闘ったに違いない。

妻、郁子さんの話によると、1年9カ月前、がんの告知を受けたと言う。20年以上も名古屋市内の保健所長や、全国保健所長会会長を歴任した医師である。手術か、放射線治療か迷ったが、手術を避けたという。

「自分が3年以上生存する確率は、たった8%と知っているのに、呑気というか、絶望を感じさせない人でした。『おれは生きる』って言うんで

すね。亡くなる半年前からでしょうか。もう骨と皮ばかりの体で『生きる』ことはいいことだ。生きていくだけでもありがたい」と、いつも口癖のように言っていました。死ぬ間際に、外国暮らしの息子が帰国して『家のごとは安心してくれ』と言いますと、意識がないと思っていたのに、目をパッと開け、じつと息子を見詰めていました」

## 「生きる」「尊厳への配慮」

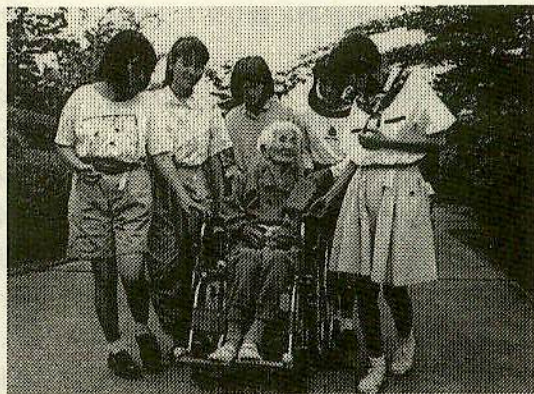
「がんの治療で大事なものは、がんそのものへの局所的関心ではなく、食事や患者のストレスに配慮するとともに、病院の大部屋制度の改善など、具体的な対応と施策だ」

「病院における雑居部屋は、給食のあり方とともに、人間の尊厳を無視するものです。医療技術の目を重視する臨床医学と、日本の医療制度の非人間性があります」と指

「葬式はやらないでいい。墓もつくるな」が遺志だった、という。近親者だけで密葬をすませ、告別式は行わず、代わりに友人たちが「しのぶ会」を開いた。

という趣旨を、小栗さんは「がん入院治療記」で書いていた。昨年11月にいただいたお手紙にも

摘していた。ひとりの医師の、病床からの告発である。心身の障害に悩む人々への限らない愛情と、権力への鋭い抵抗感を持った人だった。



写真家・田邊順一さん撮影  
—本文とは関係ありません

小栗さん、いつか私も死後の世界に旅立つことでしょう。あなたとの再会を夢見していますよ。お疲れさまでした。  
(特別養護老人ホーム職員) 毎週土曜日に掲載